

若い詩人の肖像

伊 藤 整

新 潮 社 版

若い詩人の肖像

昭和三十一年八月二十七日印刷
昭和三十一年八月三十一日發行

定價 參百貳拾圓
地方賣價 參百參拾圓

著 者 伊 藤 整

發行者 佐 藤 亮 一

發行所 株式會社 新潮社

東京都新宿區久來町七一
電話東京(34) 代表七一一一八
振替東京 八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

目次

一 海の見える町	五
二 雪の來るとき	六
三 卒業期	一二
四 職業の中で	一七
五 乙女たちの愛	一八
六 若い詩人の肖像	二三
七 詩人たちとの出會ひ	二七
あとがき	三六

裝
幀
品
川
工

若い詩人の肖像

・
・
・

一 海の見える町

1

私が自分をもう子供でないと感じ出したのは、小樽市の、港を見下す山の中腹にある高等商業學校へ入ってからであつた。その學校は、落葉松に蔽はれた山の中腹を切り崩して、かなり廣い敷地を取つて建てられてあつた。校舎は薄い綠色に塗つた木造の二階建て、遠く海に面してゐた。建物の裏手に三つの棟が山の方に伸びてゐた。校舎の主屋の中央は三階の塔になつてゐた。その眞下の玄關を入つた所のホールには、平行した二本の階段があつて、それを登ると、更に二階から、三階の塔に登るラセン形の鐵製階段が、半ば裝飾の役をして、ハリガネ細工のやうに取りつけられてあつた。數へ年十八歳の私には、その校舎がずるぶん立派に見えた。玄關の左右にひろがる主屋から後方の崖下まで延びた三つの棟は、階下が小教室や事務室になつてゐて、合併教室と呼ばれる大きな教室がそれぞれの棟の二階にあつた。

校舎全體を薄綠色に塗つてあるのが、しやれた感じがした。この學校は三年制の専門學校で、各學年が四つのクラスに別れ、それが五十名づつであつたから、一學年が二百人、學校全體で六百人の生徒がゐた譯である。生徒は、五年制の中學校や商業學校を終へたもので、その新入生の平均年齢は數へ年で十八九歳であつた。私はこの港町の中學校を終へたばかりで、數へ年十八歳であり、同じ中學校から一緒に入つた仲間が七人ほどゐた。その同じ町の商業學校から入つたのは、もつと多く、十五人ぐらゐはゐた。その外は、全國各地から、この北國の専門學校を自分にふさはしいものとして選んで入學して來た青年たちであつた。受験者は入學者の四倍ほどあり、大正末年の官立の専門學校としては二流の學校であつた。この學校は開設後まだ十年ぐらゐにしかなつてゐなかつたが、生徒の氣風が素直で、都會ずれしてゐないためか、就職率は良い方であつた。だからここを卒業した青年たちは、安全な勤め人の生活を半ば保證されたやうなものであつた。

海沿ひに長く伸びた小樽市の背後を圍んでゐる山の中腹まで、かなり急な坂を二十分ほど登つたところの左手に校門があつた。門を入ると、左方の海側には、テニス・コートを前にした二階建の寄宿舎があり、右の山側には生徒控室にも使はれる講堂があつた。その寄宿舎と講堂の間のゆるい坂をのぼると、右手に二階建の主屋があり、左手は芝生の生えた校庭で、小樽の市街と港の水面がそこから見下された。主屋の正面の眞中に、芝生とその下方の港に面して玄關があつた。この主屋の向う端から鍵の手に校庭を圍むやうに左方に突き出てゐるのが、赤煉瓦二階建の商品陳列館であり、またその陳列館から、もう一つ校庭の端の方に伸びてゐるのが、平家の大きな圖書館であつた。遠い國から來てゐる生徒が多いので、寄宿舎は、その門のそばにあるので足りず、もう三棟、これは

ずつと坂の下、高臺になつてゐる町の家並の中に、教師たちの官舎と並んであつた。半ば工業學校的な所のあるこの學校は、その外に、石鹼工場を持つてゐて、それもこの官舎の近くにあつた。

學校内にある寄宿舎にある生徒をのぞけば、半分以上の生徒たちは、毎朝下の町の寄宿舎から、

または下宿屋や自宅から、二十分あまりかかる長い坂をのぼつて、登校した。彼等はこの坂を地獄坂と言つた。坂を登つた生徒たちは、校門を入つた右手、寄宿舎の向ひ側にある生徒控室に入り、そこで靴を脱いで草履かスリッパに取りかへる。その生徒控室の入口には、掲示板がある。生徒たちは、そこから階段廊下を上つて、一段高いところにある主屋の横手から教室に入るやうになつてゐた。階段を上つて主屋に取りついた所に、賣店とか購買組合とか言はれる室があつて、男女の事務員が居り、そこで教科書、ノート、煙草、雜貨類を買ふことが出来る。そこからリノリウムを張りつめた一間幅の廊下を左方に折れてまた右に折れると、この建物の主屋の玄関の、二列の階段のあるホールに出る。賣店の所から右方へ折れると、主屋から別れた一番右手の棟の尾の所に達する。そこからまた長い登り坂になつた廊下があつて、校舎の一番裏側にある別な建物に入る。そこには化學實驗室や階段教室などがあり、また、この實業學校で教へる工業的な特殊課程に關係する教師たちの研究室がある。

私がこの學校に入るまで學んでゐた中學校は、ここから見下ろされる港町の右方の端の谷間にあつた。その中學校の、むき出しの板張りの廊下や、そこで週一回位づつ當る拭き掃除の當番や、意地悪く名指して黒板の前に立たせる數學教師や、牢屋番人のやうな強制力で私たちに機械體操や擊劍をやらせた體育の教師などのことを考へると、この高等商業學校では、私たちは戸まどひするぐ

らゐ寛大に扱はれた。

入學式の日、半白のイガグリ頭に、霜降りの服を着て、小さな金縁眼鏡をかけた伴といふ校長が、生徒への祝辭として「本校においては諸君を紳士として扱ふのでありますから、諸君もまた、紳士といふ言葉にふさはしい行動をされることを希望いたします」と言つた。壇の兩側に並んでゐる教授たちも、ある人はいかにも若々しい學者風であり、ある人は重厚な紳士風であつた。中學校の式の日のやうに、囚人を監督するやうな眼で生徒を見てゐるものはなかつた。生徒の方もまた入學早々なのに、髪を伸ばし、ポマードの匂ひをさせてゐるのがあつた。上級生は、殆んどみな髪を伸ばし、ポマードをつけてゐた。リノリウムを張つた廊下や、スチーム・ヒータアのラディエータアのある教室の中で、そのポマードがよく匂つた。それは大人の匂ひであつた。いま自分は詰襟金ボタンの制服を着てはゐるが、やがて間もなく勤人になるのだといふ意識を持つてゐる青年たちの身だしなみの匂ひであつた。私は、自分がもう子供として、また囚人のやうな中學生として扱はれてゐないことを感じた。そして、初めはオツオツと、やがて外形だけは當り前に、同級生たちの大人ぶりを眞似るやうになつた。

私は、同じ中學校から入つた同級生たちと一緒に髪を伸ばしはじめた。髪を伸ばすと、友人たちの童顔が、急に大人に見えて來た。私と同じ中學校から入つた仲間のこの變化は、私を驚かせた。彼等と同じやうに、自分の顔も大人になつて來てゐるのだ、と私は考へた。私たちは、その中學校の三四年生、數へ年で十五六歳になつた頃、一樣に、自分の性に惱まされた。そして自分たちは、本當はもう大人なのではないか、と考へはじめてゐた。しかも生活の形は、囚人的な中學生といふ

子供じみた粹に閉ぢこめられてゐた。私たちは、その矛盾をたがひに認め合つた。そして仲間の誰かが自分の性を笑ひ話にするやうなことがあると初めて息をつくといふ、あの少年期から青年期に移る男性に特有な、汚れと自棄の混つた救ひのない氣持を日常抱いてゐた。

この學校で自分が大人として扱はれる事が、その自棄的な氣持から私を、また私の仲間を解き放つた。私たちは髪を伸ばしはじめ、自分たちの顔が大人に見えることをたがひに認め合つた。もう私たちは、檻に押しこめられ、その中で自分の排泄物に汚れてゐる外に生きやうのない動物じみた少年ではなくなつた。私たちの性は汚れや屈辱でなく、異性に働きかける戀愛であつてもいいし、放蕩の形をとつてもいいのであつた。私たちはまだそれを實踐しなかつたが、それをしてもいいことを理解し、その故に、檻から解放されたやうに感じ、四月から五月にかけての北國の櫻や青葉の季節を、さわやかに膚に感じながら學校へ通つた。學問はまた詰め込まれるものでなく、自分の學問として生徒が築いて行くのもいいし、就職のための具體的な身支度であつてもいい、といふのが學校の方針であつた。私たちは、それぞれ、自分の判斷に従つて生きていいのであつた。

私は身のまはりが自由になり、したいことは何をしてもいい立場になつたのを感じた。しかし私の大人の意識は、私の内側を満たすほどには伸びなかつた。私は友達の間にあつて、ただ彼等と同じやうに自分を大人だと信じてゐるやうな顔をしてゐた。

この學校には、私たちの中學校の卒業生である小林象三といふ若い教授がゐた。私たちが中學校の五年生の時、京都大學の大學院を終へてこの専門學校に赴任して來た二十七八歳のこの教授は、母校であるその中學校にも講師として週に一回づつ教へに來た。色が白く面長で、少し出齒であつ

た。叱りつけたり、訓戒したりする中學教師風のところが全くなく、學問にのみ心を使つて來た人に特有の、明るい、濁りのない目をしてゐて、外の中學の教師たちとすっかり違つて見えた。最初の時間に小林教授は十分間ばかり英語で挨拶した。英語を自由にあやつるこの先輩を、私たち學生は、眩しいやうに眺めた。その頃この町にゐたジョーンズといふイギリス人がこの中學校へ會話を教へに來てゐたので、私たちは英語には多少耳なれてゐた。しかし小林教授の英語の方が、かへつて分らなかつた。イギリス人の教師は、中學生向きに短いセンテンスで話したが、小林教授は容赦なくその實力を發揮したせゐらしかつた。

この高等商業學校へ入つてからの小林教授の最初の時間に、私は購買組合で買つたシングのアイランド劇のテキストを机の上に置いて、壇の上の教授を見上げ、先生は先輩であり教へ子であつた中學生のうち、私と藤田小四郎と崎井隆一の三人がこのクラスにゐることを知つてゐるだらうか、と考へた。小林教授は、最初の時間に入學試験の英語の成績の話をして、どの生徒も出來なかつた所を説明した。そして最後に、このクラスでは伊藤君がよく出來た、と言つた。私は嬉しさに顔が熱くなつた。そして自分が出來る方なのだらうか、と思つた。私はウィリアムといふ固有名詞を Wm. としてあつたのが分らなかつた外は、大體出來たと思つてゐたが、皆の中から選み出して指摘された時、私はうれしかつたばかりでなく、小林教授が先輩としての私を覺えてゐたことを知つた。私は自分が入學できたのは、英語や國漢のせゐでなく、出來ない筈の數學が七十點ほどれたからだと思つてゐた。しかし、私はこの時、英語は自分が出來る方らしい、と思ふことによつて、私よりも大人びて見える同級生や都會育ちの才走つた同級生に感じてゐた劣等意識から救はれた。

それが私がこの學校で落ちつきを覺えたはじめてであつた。

私はこのとき、満で十七歳と三ヶ月ほどになつてゐた。中學校から一緒に來た友人と一緒に髪を伸ばしはじめてゐたけれども、私は自分があらゆる事に少年らしい踏ひを感ずるのを隠してゐた。私は學問とか學校の組織といふものは怖れなかつた。それは、學問といふ形の枠がきまつてゐて、それを埋めて行けばいいことが分つてゐた。しかし私は、他人にものを言ふ時に、どういふ表情をし、どういふ言葉の約束を守ればいいのか分らなかつた。大人たちの使ふ普通の物の言ひ方は、私には、非常に粗雑な、空つぽな、鐵面皮な表現法に思はれた。そして同級生たちは、大人びたものごしの生徒ほど、その大人らしい粗雑な表現を使つた。いづれは自分もあの世間並みな言ひ方や考へ方を身につけなければならぬだらうが、いまの所自分にはとてもできない。さう思つて私は、自分が精神的に發育不全の少年であるやうに感じた。

私は自分を、大人のふりをしてゐる子供、または普通人の言動をする能力のないニセ者と感じてゐた。私がそれ等の普通人の型に入つて行けなかつた理由は、私の言葉には自分の育つた漁村の東北訛りが混つてゐて、全國から集まつた級友たちの使ふ「内地」の言葉に較べて踏ひを感ずるせゐらしかつた。しかしそれだけでなく、私は十五六歳から近代日本の象徴詩や自由詩やヨーロッパ系の譯詩を読み、自分でも詩を書き、詩の表現を自分の心の本當の表現だと信じてゐたからであつた。詩の表現以外の言語表現を、私は眞實のものと見てゐなかつた。

私は、自分が近代のヨーロッパや日本の詩人たちの見方で周圍を見てゐることを、人にあらはに示すのを怖れた。詩の中の感情や、詩の中の判斷を日常生活の中に露出すれば、人を傷つけ、自分

も傷ついて、この世は住み難くなることを、私は本能的に知つてゐた。私は詩を読み、詩を書くことにだけ結びついてゐる自分の心の本當の働きを、人目に曝すのを怖れた。しかもその心は、この学校の自由な校風といふものや、大人びた同級生たちの言動を、次第に判断しはじめ、それ等ものが直ちに勤人氣質や學問や體験の銜ひと結びついてゐるのを知つた。私は自分の外の形を、勉強好きの、内氣な、一番年弱の生徒、といふものに作つておき、それによつて級友たちの世間並みの型に落ちこまないやうに自分を守つた。私が彼等のやうに大人びた言葉で女の噂をしないのも、いやな匂ひをまき散らすポマードを髪につけないのも、やがて入るであらう商事會社や銀行の噂をしないのも、同級生たちの俗物性が耐へがたいからではなく、私がウブでもの知らずだからだ、といふ形を私は選んだ。そして私は、「ウブ」で「オクテ」な一人の生徒といふ自分の姿の中に、ヴェルレーヌの傷つき痛む幼な子のやうな心、萩原朔太郎の色情と憂愁を通しての生の認識、千家元麿の悲しいほど無垢な眼、イエーツの幻想による造型などから學んだ感じ方や表現の仕方を、本能的な自己防衛の衝動に従つて、押し隠してゐた。

内氣、ウブさ、オクテ、それ等の外形はずるぶん私の役に立つた。私はこの高等商業學校の廊下を、そのやうな外形に包まれて、ひっそりと目立たぬやうに歩いた。しかも時々私は、自分の詩の心を疑つた。自分が本當にオクテではないのか、實社會で、いな、この學校で使ふ言葉や考へ方もまだ手に入れてゐない發育不全の少年ではないのか、といふ劣等感に襲はれた。それは、大正の終りに近い一九二二年のことであつた。

入學後間もないある日、生徒控室のそばの掲示板のある所から本屋に上る階段の中途に、學校新聞が張り出されてゐた。それには大きな見出しに赤インキで印がつけてあり、ある教授の攻撃文がつてゐた。私は立ちどまつてそれを讀んだ。それは、その教授の講義が、どこかの大學の教授の講義と全く同じであり、その教授は、大學生時代に自分の書き取つた教師の講義をそのまま喋つてゐるだけである、といふ意味のものであつた。それを讀んだ時、私は、この學校にはあの思想を持つた生徒が何人もゐるにちがひない、と考へた。

私の入る前の年、全國の高等學校や専門學校に軍事教練が行はれることになつた。その年は、第一次世界戦争が終つてから四年目に當り、世界の大國の間には軍備制限の條約が結ばれてゐた。世界はもう戦争をする必要がなくなつた。やがて軍備は完全に撤廢される、といふ評論が新聞や雜誌にしばしば書かれた。軍服を着て歩く將校が失業直前の間の抜けた人間に見えた。さういふ時代に、軍隊の量の縮小を質で補ふ意味と、失業將校の救済とをかねて企てられたこの軍事教練は、強い抵抗に逢つた。この企ては、第一次世界戦争の終了とロシア革命の成立によつて、自由主義、共產主義、無政府主義、反軍國主義などの新思想に正義を認めてゐた知識階級や學生の反感を煽つた。いまその一九二一年の歴史を見ると、それは日本共產黨が創立された年であり、社會主義の文藝雜誌「種蒔く人」が發刊された年であり、日本勞働總同盟が誕生した年である。私の幼年時代からの知人であつた小林北一郎といふ青年は、私がこの學校に入るのと入れちがひにこの學校を卒業し

て、東京の商科大學へ入つた。私の村出身の最も目立つた秀才と言はれたこの青年は、この年に、中學五年生の私に、ブルジョアとプロレタリアといふ新しい言葉を教へ、この二つの言葉を覚えておかないとこれから世の中に遅れる、と言つた。

そしてその年、即ち私が入學する前の年に軍事教練が實施された時、この高等商業學校の生徒たちは軍事教練への反對運動を起した。それに續いてその運動は各地の高等學校や大學に飛び火し、全國的な運動になつた。北國の港町の、この名もない専門學校は、その事件のために存在を知られるやうになつた。しかし、その軍事教練は、結局實施された。そして私たちも入學早々週に一度、菅大尉といふ、この學校の事務をしてゐた五十歳すぎの老大尉にそれを受けた。大きな口髭を生やし、瘦せて顎と頬骨の出張つた菅大尉は、その軍事教練の時に、私たちがどんなにダラシなくしても叱ることがなく、君たちが形だけやつてくれれば教へる方も義務がすむんだといふ、悟つた坊主のやうな態度で教練をした。私たちは中學校の體操教師の前で感じた緊張感を全く失つてゐた。私たちは、軍事教練をバカバカしいと思ひ、のらりくらりと動きながらも、その菅大尉に腹を立てる事がどうしても出来なかつた。

私は、その階段廊下の壁に張られた某教授攻撃の學校新聞を讀んだとき、すぐにその軍教反對事件を思ひ出した。この學校には、あの連中がある。ここではまた何が起るか分らない。そして、自分もまたその騒ぎの中に引き込まれるのではないかといふ、怖れとも期待とも分らない胸騒ぎを私は感じた。その新聞を讀んでから四五日後のことだつた。私はまたその階段廊下を上つて、本屋の正面の方の教室へ行かうとしてリノリウムの廊下を左へ曲つた。すると向うから、髪を伸ばして七